

80 誌上発表

万全の鍼灸

橋本 典子

日本鍼灸研究会

はじめに

万全(1499~1582)は、羅田県(現在の湖北省)の人で、字は密齋、明代の医家である。祖父、父と続く有名な小児科医の三代目で、家学を継承し、小児科、婦人科、痘疹に精通した。小児の生理学として、五蔵有余不足の説である「三有余、四不足」の理論(肝・心・陽は常に有余し、脾・肺・腎・陰は常に不足する)を説き、脾胃の治療を重んじた。

方法

『万密齋医学全書』(『明清名医全書大成』)所収の『養生四要』3巻、『保命歌括』35巻、『傷寒摘錦』2巻、『広嗣紀要』16巻、『万氏女科』3巻、『片玉心書』5巻、『育嬰家秘(育嬰秘訣)』4巻、『幼科發揮』4巻、『片玉痘疹』13巻、『痘疹心法』23巻の10書に見られる鍼灸条文について調査し報告する。鍼灸条文は「鍼」「針」「刺」「砭」など鍼法に関する文字を含み、かつ明確に施術対象(穴など)があるもの(禁鍼条文も含む)、灸法条文は「灸」「艾」など灸法に関する文字を含み、かつ施術対象や壮数がみられるもの(禁灸条文も含む)とする。

結果

対象の10書における鍼法及び灸法の条文数は次の通りである(丸括弧内の数字は回数)。『養生四要』: 鍼(1), 灸(2), 『保命歌括』: 鍼(33), 灸(33), 『傷寒摘錦』: 鍼(3), 灸(4), 『広嗣紀要』: 鍼(3), 灸(3), 『万氏女科』: 鍼(3), 灸(0), 『片玉心書』: 鍼(10), 灸(12), 『育嬰家秘(育嬰秘訣)』: 鍼(2), 灸(10), 『幼科發揮』: 鍼(1), 灸(2), 『片玉痘疹』: 鍼(3), 灸(1), 『痘疹心法』: 鍼(10), 灸(1)。鍼灸条文の総数は鍼(69), 灸(68)である。

鍼法の施術目的が主に出血(20), 排膿(2)であるため、刺入深度の記載は見られない。悪血や毒血を排出するため、大人には三稜鍼(6), 小児には蜚鍼(5)や鉞鍼(2)が用いられている。施術場所は患部(31)あるいは経穴(41)で、患部への施術は特に痘疹治療で用いられ、経穴は主治を意識して使われていたと推測される。使用する経穴の分布を調べると、頭・顔・頸(3), 手足(21。手は上腕~手, 足は大腿~足), 胸・腹・背(4)で、手足の穴を多用している。

施灸の壮数は、10壮以内(15), 11~99壮(6), 100壮以上(0)であるが、七倍壮(二七壮など)や随年壯の記載も見られる。施術場所は、患部(4)と経穴(97)であるが、経穴の所在部位は頭・顔・頸(12), 手足(50), 胸・腹・背(35)で、鍼法と同様に手足の経穴が多く用いられる傾向にある。『片玉心書』や『育嬰家秘(育嬰秘訣)』では、腫脹や丹毒以外の疾患に対しても灸が使われており、とりわけ小児への灸治療の重要視がうかがえる。その他に特別な灸法として、四花患門灸法が見られる。隔物灸は、『保命歌括』に附子餅灸(1)と塩灸(1)の2法の記載があるに止まる。

まとめ

万全の医学における鍼灸は次のように推察できる。鍼法は三稜鍼や蜚鍼による排膿・出血と、主に手足の経穴を用いた主治證治療に使用されている。一方、灸法は様々な病證に対し、手足や体幹部の経穴に少壯灸を施すという方法がとられている。こうした使い分けは、明代医家の鍼灸に概ね共通するものである。なお、万全の専門分野である小児への治療においては、病状に応じて鍼と灸を適宜使い分けており、小児鍼灸の観点から注目される。